

文久四年二月二日より文久四年二月三日まで

P8311079 right

て旅人足を留め殊に東海道往来旅人多ければ、右を以て比すべからず、右は川崎の六郷川を挟(はさみ)て川手前へ一宿を立んといふ議、曾(かつ)てありしにより後考に、記し至ぬ、越堀宿を外れ坂を登り

左の方濱を隠し山の半弦に殺生石いま猶ありといふ、望めども見へ□す、猶少く行て富士見(坂)茶屋と(唱ふる坂標せし茶店なり、此所より富士山を望む外に此先において一切富士を見る事なし

と楚ぞ)、此(辺)跡宿辺より初て縄帯杯せし婦人女子馬を牽るを見る、第十時過午休(芦野休)芦野宿へ着、別地頭芦野采女家来町支配役外壱役両所出迎、足軽兩人先導す、寄居村小休

白坂宿小休、当領主阿部播磨守家来役に四人両所に出迎足軽兩人先導す、露(ひ)もの(白川宿)竹箒(ほうき)を持行くて掃除せり、第四時過ぎ白河宿旅□え着、前同家町奉行出迎足軽兩人

先導す、領主より使者差越用聞のため家来さし出至旨申聞る、当宿は相応繁昌の躰城下の跡あり

P8311079 left

三日戊 晴天にて雪、暫にメ云重々雪紛飛午前全烈風又乍雪乍晴に陰不一

朝三十四度(撰氏一度) 昼三十八度(撰氏三度)

願第六字時半頃出立、昨同様町奉行出迎足軽兩人案内、小田川野立にて踏瀬小休第十一字時前

(矢吹休)午休所、矢吹宿に着、同宿領主阿部播磨守家来兩人各所に出迎、足軽兩人案内あり、本陣は鍋掛り

奥の間等ありて壯観の広廊なり膳部は二ノ膳を附け割烹相応着□し、是迄駅とし(須賀川泊)待遇に殊別(*)なり、笠石小休、同所も前同領主家来壱人出迎、第三時前須賀川旅宿へ着す

当宿も前同領主家来地方役人、馬差配役等出迎足軽兩人づつ領内始終先導す、本日の雪は醸し気せりにあらず、烈風のために山々の積雪を吹落し来れるにて密雪紛飛

の中、日影陰快恰も薄陰の日に落花を見る如し、風力の烈敷甚敷従僕駕に乗れるものは何れも両度三度程づつ駕を吹□されし趣也、依て一同へ別段手当遣す、祖母見錢

袖炉因賦 小炉貯火に長存、袖裏懐中太暖温覆育深

*1:殊別(しゅべつ)、区別すること

(○)内は細字双行(一行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

□印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。

【判読不可】、■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。